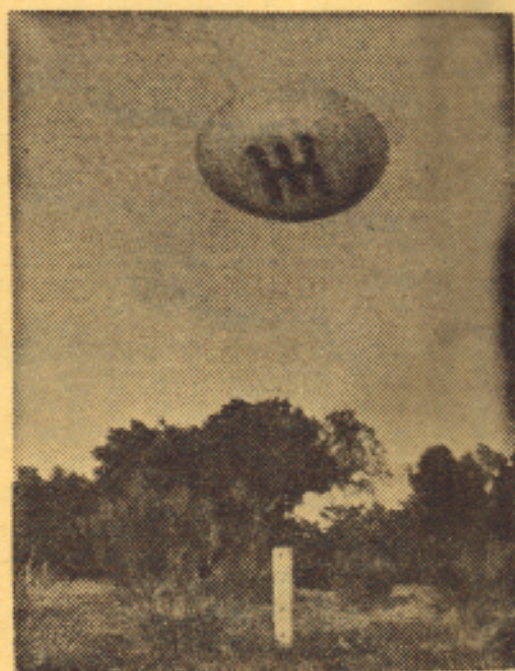


UFOと宇宙哲学の研究誌

日本GAP

ニューズレター



No. **40**

日本GAPニューズレター

1969年

第40号目次

UFOは実在し、呼びかけに応じて現われる	ジェリー・アダムズ	1
友星人が地球人を救うために来ている	ウィラード・クロプトン	2
シャーロット・ブロップからの便り		4
私は金星文字を解読した!	バシル・ヴァン・デン・バーグ	6
サン・ホセ・デ・ヴァルデラスのUFO	アントニオ・リベラ	12
或る不思議な体験とUFOの科学	村雨光之介	22
第4回日本GAP総会開催		28
UFO観測会を実施—オレンジ色のUFO出現!		30
日本GAP大阪支部結成/東京月例研究会会場を変更		31

表紙写真はスペインに出現した奇怪なUFO。  
詳細は本号記事「サン・ホセ・デ・ヴァルデラスのUFO」に一

## UFOは実在し、 呼びかけに応じて現われる

ジュリー・アダムズ

こちらの目をじっと見つめておだやかに話しながらシャーロット・ブロップ嬢は彼女の最上の友人たちは金星から来ると説明する。「ヴェニスではなくてヴィーナス（金星）です」

これがシャーロット啓発協会で金曜日之夜語った言葉である。ユニテリアン教会で彼女は大気圏外から来る人々との種々の体験や、なぜ彼らが来るのか、どのようにして来るのか等について語った。

ブロップ嬢はアーサー・マーレイ研究所のダンス教師だったが、その後UFOに関する八種類の著書を出したジョージ・アダムスキーの秘書として働くようになった。

昨年死んだアダムスキーは（注）この記事は一九六六年に書かれたもの）円盤の正体をつきとめたばかりでなく、その一つに乗って金星へ行ったと称している。

この金星旅行には政府派遣の科学者二名が同行したのだけれども、米政府はその秘密を洩らさないだろうとブロップ嬢はいう。

ブロップ嬢が、ブラザーズとかシスターズ、とか呼ぶ宇宙の訪問者たちは金星、火星、土星などから来るが、その九〇パーセントは金星から来る。宇宙人たちは大抵の国家指導者と話し合っているが、そのなかにはジョンソン大統領、アイゼンハワー元大統領、

トルーマンなども含まれている。

電磁的な力で推進するこの円盤は、一九四〇年代に月面に電波を反射させようという米国の実験以来主として来るようになった。この電波が月に達したとき、その信号がそこにいる火星や金星の「ブラザーズ」によってキャッチされた。それによって彼らは地球人が核兵器を開発中であることを知り、その電波をSOSと解釈して、地球が大混乱におちいったと考えた。

火星は地球よりも数千年進歩しているので彼らは地球人を救うために来た。大体に金星人や他の惑星人は平和を望むだけである。彼らは敬意を示さない人に近づくだけで、地球人のだれかが宇宙人を見たといおうものなら本人は社会から排斥されることを知っている。

彼ら宇宙人は生命の尊さを認識している。彼らは知的な高貴な謙虚な人々である。偉大な芸術作品はその作者と等しいのと同様に人間もその創造主と等しいことを彼らは知っている。

ブロップ嬢はウィスコンシン州アプトンでの講演中に彼らの二人に会った。彼ら宇宙人は歌うような美しい声で話す。

メキシコに現われた二人の宇宙人は美しい髪と目を持ち、二名の若いメキシコ人考古学生を円盤に乗せてひとまわり飛んでみせた。この学生たちはタクスコ付近の古代アステカの紋様を研究していたもので、その紋様は宇宙からの訪問者を扱ったものだった。現代の宇宙からの訪問者は援助しようとしているのだという。

ブロップ嬢によると円盤群はそれを認める人々を支持する。そしてあたかも合図に應じるかのように出現するという。

ミシガン州バトルクリークの事件について語った後、彼女は当

## 友星人が 地球人を 救うために 来ている

ウィラード・クロプトン

日周辺の町々の上空を円盤群が秒速九、六四八、〇〇〇フィートで飛び、最後はバトルクリークの上空に來たのだという。ここへ出現するかどうかについては何もいかなかった。  
(ザ・シャーロット・オブザーヴァー紙一九六六年十二月十日付)

宇宙人が地球人のやっている事に注目していても当然だとシャーロット・ブロップはいう。「核爆発を起こすごとに地球は少し揺れて、正規の軌道から少しずつはずれるのです」もし地球がはずれ続けるならば、太陽系の電磁的なバランスを狂わせることになり、金星やその他の近隣の惑星群に大災害をもたらすことになるという。「彼らは地球人に自滅してもらいたくないのです。彼らにも家族があるのですから」

魅惑的な赤髪の三十才くらいに見えるブロップ嬢は宇宙人—これをブラザーズとも呼ぶが—を高度に進化した人類で、戦争も病気も知らず、科学技術は地球をはるかに超えている人々だと述べる。少なくとも聖書時代以来、友星群の宇宙船は地球を注視し続けてきたと彼女は断言した。いわゆる UFO とか空飛ぶ円盤というのは彼らの観測機なのである。ブラザーズの多くは現在われわれのあいだにまじって住み、地球人になりすましてすごしている。時機がくれば彼らは正体を明らかに

し、別なブラザーズが大挙して着陸して、地球人が破壊を避けて永久の平和を確立するのを援助するだろうと彼女は言明する。

静かな集まり

ブロップ嬢はデヴォンシャーの地階アパートの一室で毎日曜日午後一時三十分から熱弁をふるう。(注||これはシャーロットがワシントン市に在住中のことを述べたもの)このアパートはトーマス・H・ハイマン(二十九才)のもので、人好きのする、赤いあごヒゲをはやしたイェール大出のこの人は彼女の考えに熱中している。ハイマンは俳優にして作曲家、有能なフォーク歌手であり、巡回旅行でしばしば演奏する。彼の作曲のなかに、宇宙から来る銀色の船団—というのがある。

日曜の例会にはだれでも歓迎される。今回は十二名の人が顔を出した。公務員、退職者、主婦、学生などだ。そのなかには大学卒が数名いて、みな静かに聴いている。

おだやかにしかも熱をこめてブロップ嬢は述べた。政府は UFO について真相を知っているけれどもそれを隠している。それはもし、自由エネルギー—UFO を動かしている電磁気的な力—の存在が知られるようになれば経済上の大混乱が起こるのでそれを恐れているためだという。

自由エネルギーを用いればいかなる共同社会といえどもごくわずかな費用で熱、電力、水などが得られるようになり、これが株式市場を破壊することになるだろうと彼女はいった。  
ブロップ嬢はこの集会で特別な権威をもって話すが、これは故

ジョージ・アダムスキーとの関連があるため、彼女はもとその秘書だった。二年前に講演中に七十四才で死んだアダムスキーがもとその主義主張で有名になった人で、現在も米国のプロップ嬢や他の弟子たち、世界中の弟子たちが支持している。

### 洩らされた宇宙の秘密

正現な教育をほとんど受けていないポーランド生まれのアダムスキーは南ケアリアフォルニアで生涯の大部分をすごし、そこで多数の著書や論文を出したが、それらの記事で彼は地球へ来た宇宙人たちと会ったと称し、宇宙人たちが多くの宇宙の秘密を自分に洩らしたと述べている。だが彼の主張は広く科学者には認められていない。

彼の論点の一つは、われらの太陽系の十二個の惑星すべてに——彼は冥王星のむこう側に未発見の惑星が三個あるという——地球人と同様の人類が住んでいるということにある。太陽からはるか離れた地球よりも遠い惑星群にわれわれが知っているような生命がどうして存在し得るのかを説明して、地球の光や熱は直接太陽によって作られるのではなく、太陽の放射線が地球に達して大気圏の微粒子を活性化するときが発生するのだといい、同様の過程が遠い惑星群にも起こるのだという。

アダムスキーは宇宙船と称する物体の写真を多く撮影している。懐疑派の人々はこれをインチキとみなし、写真中で円盤と見られる物は実はヒヨコを育てるのに用いられる器具なのだという者もある。

アダムスキー支持者の一人で個人的に彼を知っていた人にアレグザンドリア、北モーガン通りに住むフレッド・ステックリング（三十一才）がいる。ワシントンの下町にあるレストランの経営者で、本人がいうには、二十回以上ものUFO目撃を行なっており、これは小型円盤と巨大な「母船」の両方に及ぶが、母船（複数）は長さ数マイルの大きさがあり、惑星間空間で小型円盤を輸送するために用いられると彼はいう。彼は真実の資料に基づくという宇宙機の断面図を所持しているが、それは円盤と母船の内部構造を示すものである。

昨年九月に生国のドイツで列車に乗っていたとき、彼は窓から空中に見えた、約六十機の母船の編隊を8ミリカラー映画に撮影した。彼はそれを米国防省で公開したが、そのスポークスマンは何もいわなかった。

シルヴァースプリングに住む長身紅毛の夫人マドレーヌ・ロドファーもアダムスキーを知っている。アダムスキーは数度そこを訪問してロドファー夫妻宅に滞在したことがあるのだ。

一九六五年二月二十六日に一機の円盤が彼女の自宅の上空に出現し、数分間前後に動いて前庭の上空百フィートの低さまで降りて来た。このときいた別の唯一の目撃証人はアダムスキーで、彼は当時その家の客として居合わせたのであって、それから二カ月もたたぬうちに死んだ。

ロドファー夫人はそのとき撮ったという円盤の映画フィルムをしばしば自宅で公開している。彼女の説明によれば、その円盤は色が濃紺色で、直径は二十五ないし三十二フィート、円窓（複数）があったという。注||この映画の数コマの写真を本誌第34号に掲

載済)。この円盤は低いヒューッという音を放っていたが、それは夫人のカメラの音よりも低かった。

彼女は力説する。「私はヒヨコのカゴを見ていたのではありません。内部に美しい人々が乗って飛びまわる円盤に似たヒヨコカゴなんてあるかしら」

ロドファー夫人が信ずるところによると、政治家たちはUFOの真相を隠しているが、これは本気になって洩らせば彼らの選挙に悪い結果が生じるのを恐れているからだという。彼女は世界の宗教界のリーダーたちをも非難する。宇宙人の存在が知られるようになるとリーダーたちは勢力を失うのを恐れているからだ。

人々が私を狂人だと思っても気にしません、とプロップ嬢は言った。「UFOの正体を知っていますしそれが鳥、飛行機、太陽の光、観測気球、沼地のガス、光球等でないこともわかっています」(ワシントンポスト紙一九六七年七月二日付)



シャーロット・プロップ

シャーロット・プロップからの「便り」

今年八月十七日付で編者久保田宛にきた私信の一部

私はウィスコンシン州への長い旅から帰ったばかりで、たまっている郵便物に回答を出そうとしていたところでした。この旅行は予想以上に長くかかりました。多くのテレビ、ラジオ放送局が出演を依頼してきたり、新聞社が書きたてようとしたりからです。帰途の出発が遅れてはいけませんので、テレビ一回とラジオ一回の計二回の放送をことわらねばなりません。ウィスコンシンで出された新聞記事の切抜きをこの手紙と一緒に同封します。

「多くの人々が円盤を信じているので狂人だと思った」と私が述べたという部分はどうぞ無視して下さい。私はあんなことをいったおぼえはありません(注||ウィスコンシン州フォンジュラックのフォンジュラック・コモンウェルス・リポーター紙一九六九年七月三十一日付の第21頁に掲載された「UFOを信ずる人々は待っている」と題する記事の中で、シャーロットが円盤に関心を持つようになる以前は彼女も円盤を信ずる人を狂人だと思っていたという部分)。別に二枚の新聞記事のコピーを同封しますが、これは実に立派に書いてあります(注||前掲二篇の記事を指す)。一つは私がワシントン市に住んでいた頃にワシントンポスト紙に出たもので、他の一つは北南キャロライナの講演旅行中に取られた。私があなたにこの切抜きやコピー類を送るのは、宇宙人やラジオ、テレビ局等がまだあるということを知ってもらいたいた

めです

旅行に出る前に製作しようと思っていた録音テープを作る機会がなかったのを残念に思います。今それにとりかかろうとしているところです。それがこの手紙を出す理由でもあるのです(注II このテープというのは先般総会で公開したものと別なアダムスキー録音テープ)。私はこれから多くのテープをコピーする必要がありますから、音声の最も明瞭なのをみつけようと思います。そうしなければそのテープに私も解説を加えます。こちらではものすく多くの仕事が多まっていますから、テープの写本を作る機会がありませんでした(注IIこれは編者が依頼していたもの)。しかし帰宅したからにはできる限りの事を確実にやってくつもりです。

ユズミック・ニューズレターの第二号を受け取りましたか？郵便で送っている資料の多くが途中で行方不明になる傾向があります。今は地球がバランスを保つために多くの変化を経ようとする時代です。というのはあなたも知っているように一九五八年太陽が自転軸を変えました。太陽系の全惑星が同様のことをなそうとするでしょう。しかし私たちは地球がきわめて平穩に動いていることを知っています。これは地球自体の働きとブラザーズの援助によるものです。私たちは地球上の種々の動きを末世的な大変動とみなすわけにはゆきません。変動というものは、良き母がその子たちに清らかな安住の地を得さしめようとして起こすものであるからです。ブラザーズは目下非常な援助をしています。それで私たちにできる最上の事は、手をつないでブラザーズを援助し返すことにあり、人生の行路で出会うすべての人々にたいして

平和のメッセージを伝える「慈悲深い人」になることにあります。私たちは他の惑星から来る兄弟姉妹と共に生きる兄弟姉妹です。そして私たちは全創造物の「宇宙の父母」から生まれ出ました。その「父」というのは高貴、平安、慈悲、愛等から起こる知性で、

母は人間が生まれた惑星であって、その惑星が人間に物資を与え、母は人間が生まれた惑星であって、その惑星が人間に物資を与えてゆくことができるのです。そのとき私たちは神の息子、娘になり、地上の父の国で救世主になります。人間のなし得ることでこれ以上に偉大なことはありません。ゆえに慈悲のなかにおいて私たちは成長し、慈悲のなかにおいて地上に天国を作り出し、心が宇宙的な愛で満たされるようになります。そして私たちが慈悲の念を起こすたびごとに、この美しい祝福に満ちた力を持つ地球の雰囲気や波動の中にとけ込むのです。こうした考え方によってこそ私たちは暗黒の中に光をもたらし、ゆえに私たちに多くの仕事があります。この仕事を全人類に対する奉仕としようではありませんか。私たちが成長するとき他人も成長しますし、他人が成長するとき私たちも成長します。

あなたに平安がもたらされるように。知恵をもって前進するあなたを何物も妨害しないように。あなたが地上で運ばねばならぬものを運ぶことができるように。すべての宇宙の御子たちは平安のメッセージと宇宙の知恵を運ぶのです。しかし宇宙の御子になるためにはそのことを認識せねばなりません。その認識は信念と決意とによってもたらされます。

## 私は金星文字を解読した！

—私の発見はアダムスキーの主張を証明する！

バシル・ヴァン・デン・バーグ

バシル・ヴァン・デン・バーグ博士は南アフリカの人で、アダムスキーの著書『空飛ぶ円盤実験記』中に示される金星人の文字の紋様を解読して反重力のエンジンを発明したと伝えられる有名な人。約十年前にF S R誌に掲載された紹介記事によって一躍脚光をあびたが、一九六三年にも同誌が再度紹介した。六年前の記事で少々古いが、本誌には載せなかったもので重要な内容を含む情報であるからここにその全訳を掲げることにする。(編者)

フライイング・ソーサー・レヴェュー誌を通じて世界のできるだけ多くの読者に対し、U F O問題で最も論議的となった書物が刊行された一九五三年に始めてから以来十年間を通じて私が発見した物事の真相をここでお伝えしたい。その書物とはジョージ・アダムスキーとデスモンド・レズリー共著の『空飛ぶ円盤実見記』である。

U F Oに関して多数の書物が書かれているが、私自身の発見により心から断言できるのは、あらゆる書物のなかで最重要なのはジョージ・アダムスキー氏の著書である。私がこういふのは、彼

は徹底した誠実と正直とによって、しかも偉大な勇気をもって、円盤に関する明白な事実を世界に伝えようと努力したからである。私はアダムスキー氏に関しては全く公然と「誠実・正直」という言葉を用いるが、これは科学者と素人の両方に対して、ジョージ・アダムスキーの主張が非の打ち所のない真実なものであるという決定的な証拠を私が持っているからである。

### 注意深い判断

私は自分が読むあらゆる書物の内容について、注意深く賛否両論を考へることなしにウ呑みに信じてしまうような男ではない。両論を考へるときでも私の判断は別にしておく。正当化に必要な証拠なしに他人の言を判断することは賢明でないということを私は知ったので初めて彼の書物『空飛ぶ円盤実見記』を読んだとき、多くの人がやるように無造作にアダムスキーを非難することはしなかった。イカサマ師かホンモノかを示す証拠は何もなかったからだ。

彼の著書を読むに先立って私の円盤に対する関心はゼロだった。それ以前に円盤のことを聞いたり読んだりしたことがなかったからである。したがって賛否のいずれをとるかは何ともいえなかった。私の興味を呼び起こしたのは、アダムスキーの著書に掲載された円盤の写真と、第二次大戦中三時間にわたって私の乗った爆撃機を追跡してきた奇妙な物体が驚くほどよく似ていることだった。その件については基地に着陸してから情報部へ報告したが、その結果この種の不思議な現象の目撃はそれまでたびたび報告さ



れたけれども正体は不明だということを知らされた。

アダムスキーの物語と私の戦争中の目撃とのあいだに何かの関連があるらしいという結論に達してから、私は金星人がそのような乗物からアダムスキーに投げ落とした象形文字のメッセージの写真にすごい興味をおぼえた。

私の意見は次のとおりであった。もし彼の著書に何か真実があり、私自身の目撃と関連があるならば、この象形文字が何かの解答を与えるかもしれない。

そのとき以来私は長く象形文字と取り組み、確実な意味を持つように各文字を組み合わせようと思つた方法を試みた。そしてついに正確な「径路」を発見することに成功した。それをうければ象形文字が解読できるのである。ここに至って、これはアダムスキー氏がやった賢明なはずだったのか、それとも実際に別な惑星の人間によって彼に与えられた象形文字だったのかと私は大いに考えた。

このことは真実を発見するのにもっと多くの理由を与えた。なぜならこの象形文字は科学の最大の進歩のための基礎となるかもしれないし、さもなければ時間の浪費になるかもしれないと思つたからだ。そこでアダムスキー氏に手紙を出して象形文字の鮮明な写真を送ってくれと頼んだ。著書に出ている写真は鮮明さを欠くからである。写真を受け取ってからあらん限りの力をこめて各文字から意味をひろい集めるといふ至難の業にとりかかった。年月が経過するにつれて次第に意味がわかってきた。それは地球上のなにびとといえどもいたずらの種として用いることなど絶対にできないような情報である。その文字は円盤の真相を詳細に伝

えたすばらしい知識を示しているからだ。それは母船と小型円盤の推進法、二個の強力な磁気モーター、船体の内外の詳細な設計などを伝えているのだ！

そのモーターだけはまだ地球で発明されていないし、しかも象形文字によって解明されたからには大きな疑問が起こってくる。

「その象形文字メッセージはどこから来たのか？」明らかにこの地球上の人間からではない。それは子供にでもわかる——科学者がどんなに権威を保とうとしてもこのことは否定できない。しかも科学者は大衆を迷わしているのである。

以上の発見はアダムスキー氏の真実性と別な惑星から来る宇宙船の実際的な証拠を生み出したので、アダムスキー氏の線に沿って、まさしく大衆のものである事物を大衆に伝えたいというのが私の意図である。

政府にせよ何にせよ、いかなる干渉妨害を行なうのはもう遅すぎる。この種の妨害は数年前に予測されて、そのため過去に種々の計画が実行に移され、真実が人類にもたらされるのを妨げようとする運動に対立して世界中で極秘裏に実施されたからである。今や世界はこの証拠を有しているし、それは誤っているどころの段ではないので、アダムスキー氏は断然弁護されるだろう。

AFSR 誌通信員フィリップ・J・ヒューマンによるパシル・ヴァン・デン・バーグ氏とのインタビュー

一九六二年四月二十九日の朝、別な惑星から来た人間とのコン

タクト事件がアフリカの一流日曜紙「ステム」の大見出しとなった。この事件におけるコンタクトイー（宇宙人に会ったと称する人）はヨハネスブルグ（注||南アフリカ共和国トランスヴァール州の商業・金融の中心地で南アフリカ最大の都市）のバシル・ヴァン・デン・バーグ氏であった。私はいつもジョージ・アダムスキーを信ずる傾向にあり、このコンタクトも主として問題のアダムスキーの象形文字に基づくものなので、個人的にヴァン・デン・バーグ氏に会うことに熱中していた。二人は文通を始めたが、私は彼の謙虚さ、誠実さ、率直さに感銘を受けた。ついに第一回の会見に相互の都合のよい日がとりきめられた。

一九六二年八月二日、木曜日の朝、会見のためにヨハネスブルグのエロフ街を歩いて行くときの私の感情と想念を説明するのは困難である。或る町角に接近したとき一人の背の高いすらりとした親切そうな目付の男が、流れゆく買物客の列を見つめているのに気づいた。それがバシル・ヴァン・デン・バーグだった。そのコンタクト物語が南アフリカで大センセーションを起こし、ついには星々への道を切り開くかもしれない魔法の公式を持っていると称するその男と私は握手した。

二人はすぐに好都合な喫茶店を見つけて静かな場所にすわった。私のカバンの中には一冊のF S R誌が入っているが、それにはアダムスキーの象形文字と驚くほどよく似た象形文字の刻まれた玉石を北部ブラジルで発見したというマルセル・オーム教授の驚くべき記事が載っている（注||これはかつて円盤研究界で非常な話題となった）。私は相手がふくらんだ折込カバンと奇妙な肩かけカバンを持参しているのに気づいた。彼はそのふくらんだやつを

調べてみるといって私に渡した。それはアダムスキー象形文字を解説して発明したモーターの一部で、そのモーターの写真はレヴュー誌に載ったことがある。その物体は鋼製らしい。私が重量と生きているように見える。事実を口に出すと彼は微笑していった。「それが生きていることに気づいて下さってうれしいです。ほら、ここに磁石（複数）があります！」

それから彼はきわめて詳細にその重要性を述べて、明らかにその製作に関係のあるぼう大な量の仕事を示すファイルを開いた。そこには主写真真にあてはまるらしい数百の三角形のような図面があった。私はいかにもわかったような顔をしてしばしば偉そうにならずいたが、同時に相手をあわれんだ。科学的なわけのわからぬ言葉がこちらの無理解な耳に響いてくるからだ。私は思った。「バシル君、おまえは救われないやつだなあ。そんなことあおれには何の意味もないよ！」

彼はわかっていたにちがいない。突然次のように尋ねたからだ。「それであなたがあれほど見せたいといっていた雑誌には何が載っているのですか？」

ブラジルの象形文字に関するオーム教授の写真を見せたとき相手の反応がどうなるだろうかと思った。彼は瞬間茫然となって叫んだ。「こいつは驚いた！ 全く奇怪なことだ！ 図形がさかさまになっている。だがこれをごらんさない！」彼はアダムスキー象形文字の二枚のプリントを取り出した。それは「空飛ぶ円盤実見記」に掲載されている写真をすばらしくきれいにしたものであることがわかった。続いて彼はアダムスキー写真とオーム写真とを比較して、多くの類似点を興奮して指摘した。

二人のお茶はもう冷えていたが、それは問題ではない。「この雑誌を私にゆずって下さい。拡大鏡でもっと調べたいんです」と彼は懇願した。

「喜んでゆずりますよ。だが時間がきた。STEM誌の人たちを待たせるわけにはゆかない」STEM誌も私がヨハネスブルグに来たことを知っており、われわれ二人とインタヴェューしたがっていたのだ。

STEM誌の事務所へ急ぎながらヴァン・デン・バーグ氏はアダムスキー写真の立体的な内容と、拡大鏡で文字を調べるたびに新しい意味を発見した様子を説明した。「与えられた細目すべては無限であるように思われます。アダムスキーの写真に彼らの意味を含ませることができるとはこの金星人たちはすばらしい科学者であるにちがいない。私は符号を解読するのに昼夜働きましたよ。たびたびやめようかとも思いましたが、こつこつと続けてやると難儀な仕事に成功したのです。まもなくモーターを作りました。すべての細目はそこにありました。最初のモーターが準備できた日を決して忘れません。完全に作動しました。その日は私の誕生日でした。・・・それから「ブラザー」に出会ったのです。・・・」

二人はSTEM社に近づいていたのでそれ以上に詳細を聞こうとはしなかった。地下から印刷機の音が聞こえてくる。私は三十年前に自分が印刷所で働いていた頃を思い出した。当時は罪な空飛ぶ円盤など知られてはいなかったのに。

やがて二人は広々とした事務室へ案内された。型通りの紹介の後、私は非常な不安をもって席についたが、そうはいうもの円盤とそれを操縦する人たちを防衛する立場に立つことを名譽に思

った。心配する必要はない。私はまじめな友人たちの集まりの中にいる。彼らも「信ずる人」なのだ。

それは面白い体験で、インタヴェューは三時間近く続いた。またもオーム教授が議論的になり、私の貴重なレヴェュー誌がもう一度持主を変えることになった。翌日の日曜日に掲載される記事に写真をつける必要があるからだ。

このSTEM社の人たちが示したように、あらゆる新聞のあらゆる編集者が円盤、特にレヴェュー誌に興味を示してくればよいと思う。

うれしかったのはインタヴェューのあいだヴァン・デン・バーグ氏が私の意見や評言を支持してくれたことである。また私はこのおだやかな気取らない「やり手」がSTEM編集陣から明らかに尊敬されているのに感動した。

数時間後私はヴァン・デン・バーグ氏をバスまで見送ったが、ついにコンタクトの件については語らなかつた。読者に想像してもらうには彼の手紙を引用するより他に仕方がない。

「現段階ではっきりさせたい点は私とブラザーとの会見に関して生じたSTEM誌編集者による誤解です。最初のコンタクトではブラザーはただ象形文字の解読において私を正しい軌道にもどそうとしただけでした。五年たつてから私は動揺し混乱していたからです。その五年間にモーターはすでに完成していました。二度目のコンタクトは短時間で行なわれ、第一回目のコンタクトを確証しただけです。うわさとは違って、ブラザーは自身のスケッチを持参したのではなく、また象形文字の解読を全然助けてはくれませんでした。くり返します。ブラザーはただ従うべき正しい

道を指摘しただけです。私は正道からはずれていて、自分の感情に頼ってブラザーとのテレパシクな交信力を失っていたからです。それがブラザーの来訪の唯一の物的でした。それ以来私は多くの解決をなしとげ、自分自身の努力によってばく大な知識を獲得しました。ブラザーは『感情による妨害』の愚かしさを教えてくれ、以来私は感情に対しては警戒的となり、こうして互いのテレパシー交信径路を確立させたのです。

私の目的はアダムスキー氏の真実性と、あの象形文字はこの世界のものでないことを万人に立証することにあります。私は象形文字のことを隠したまま『あの発明は自分一人で行ったのだ』とウソをつこうと思えば容易にできます。地球上のだけ一人としてそのウソに気づかないでしょう。アダムスキーでさえも！」

私は常にジョージ・アダムスキーを信じていたが、同様にパシール・ヴァン・デン・バーグをも信ずるものである。

\* \* \*

△編者注▽右の金星文字がアダムスキーに与えられた時の様子に Flying Saucers Have Landed (邦訳版、空飛ぶ円盤実見記) 第三章中に述べてある原文を完訳すれば次のとおりになる。これは邦訳版の二三九頁以下数頁分に相当する。

(宇宙からの)訪問者が私の(写真の)原板を返してくれるという約束のため、私は絶えず警戒の状態を続けていた。私は望遠

鏡をパロマー・ガーデンズの台地にすえた。そこはるか彼方まで景色が見渡せる場所の一隅で、広大な海が展開するが、これはパロマー山の斜面の広い台地なればこそ望み得る風景なのである。

一九五二年十二月十三日(注)砂漠で最初に宇宙人に会ってから約三週間後の朝、頭上に響くジェット機の轟音で付近に何か起こったのではないかと思った。ずっとむこうに閃光が見えたが、すぐ消えた。「むこうで何かあったぞ。砂漠で見た円盤が私の(写真の)ホルダーを返しに来たのかもしれない」と私は居合わせた者たちにいった。

ジェット機(複数)が円盤を追い続けているのか、それとも円盤はジェット機が姿を消すのを待ってもう一度現われるつもりなのだろうか。

九時頃にまた空中に閃光が見えたので望遠鏡をそれに向けた。空にはジェット機の姿はなく、もし円盤が現われるつもりならば安全に來られるのだがと思った。

間違いはなかった。じっと見つめていると、円盤がこちらの方へ音もなく滑るように飛んで來るのが見えた。「朝の太陽を受けてさまざまの明るい色光をきらめかせるニジ色のガラスのような機体! うっとりとして私は見つめた。からだは緊張に波打ち、期待で背筋が震える。とうとう來た! まるで円盤の操縦者が私がかここで待っているのを知っていたかのようだ! あたにかい希望の喜びが全身に満ち溢れた。「あれは私の友だ、再び彼と会えるのだ! ここへ着陸するだろう。きつと……」

しかし期待が大きすぎた。私の所から二千ないし三千フィート、

近くの谷から三百ないし五百フィートの上空で停止してじっと滯空するように思われた。

今度こそはすばらしい写真を撮ろうと、極度の意志力を用いて興奮を抑えながら私はすばやく二枚の写真を撮った。続いて、円盤が近すぎるのでこの位置から一度に円盤の全体を写すことが不可能なのに気づいて、(望遠鏡の)接眼鏡に取り付けたカメラを廻して(つまりカメラは望遠鏡に付けたまま画面を変えて)まだ停止している円盤を更に一枚撮った。四枚目を撮影したとき円盤はまた動き始めた。

あとで現像してみると最初から三枚は鮮明に撮れていたが、四枚目は動いたので、ぼやけたけれども悪くはなかった。

接眼鏡上のカメラの位置を変えているあいだに目測とあたりの距離との比較によって円盤の大きさを慎重に計ってみた。砂漠にいたときは直径二十フィートと思ったのに、今度は径約三十五ないし三十六フィートあることがわかった。私が測定し得た限りでは高さは十五ないし二十フィートだった。

私から百フィート以内に近づいたと思われたとき、丸窓の一つがスッと開くや一本の手が伸びて、十一月二十日に宇宙人の友が持って行ったのと全く同じホルダーが地上に落とされた。それが放たれて円盤が頭上をすぎる直前に手が軽く振られたような気がした。

私はホルダーが落下して地面にとどいたとき岩にぶつかるのを見た。歩いて行ってひろい上げると、岩にあたった箇所が少しへこんでいるのが目についた。ポケットからハンカチを出して注意深くひろって包んだ。内部に何があるかもしれないし、外部に指紋

があるかもわからないので、きずつけないようにしようと思ったからだ。

そのホルダーが返って来たことはあの円盤が砂漠で見たのと同じものであることを立証したし、窓から手が振られたことにより、ホルダーを落としたりしたのは私が(砂漠で)会ったのと同じ人であることを暗示していた。

得意満面の私を想像されたい。またも私は意識が高まって、一時に二つの世界にいるのだという自覚が起こるのだった。

頭上を通過してから円盤は台地の小さな峽谷を越えて北方の山々のふもとへ向かって飛んで行った。

樹木の頂上よりも低く降りながら円盤は台地の上部にある井戸と一軒の小舎にあまり接近したので、私が前もって警告しておいた人々によって目撃され撮影された。

円盤が小峽谷を越えるには数秒を要しただけで、すでに台地を飛び越えていた。しかしなお彼方の木々の上を低く、前景の山々のふもとに近づいて飛んで行く円盤をはっきりと見ることができたが、やがて東方へ急速に飛行し続けて青い朝もやの中に消えていった。

△編者注V右のホルダー中の原板に金星文字が写されていたのである。邦訳版「空飛ぶ円盤実見記」中には右と少々異なる部分や省略箇所があることに気付かれると思うが、それは問題ではない。パイオニアたる最初の訳者高橋豊氏に深く敬意を表する次第である。アダムスキーはジャババ付旧式カメラとフィルムパックを使用したように思われるが詳細は不明。

— スペインの驚くべきUFO撮影事件 —

サン・ホセ・デ・ヴァルデラスの

UFO

アントニオ・リベラ

未確認飛行体の最もいらさせせる点の一つは、その現象の捕えがたい性質である。無数の健全な精神の持主たちが空中や地上にさえもUFOを見ており、目撃者のなかには高度の科学技術能力を持つ人さえいるのに、リーダーにもキャッチされていとうのに、懐疑派は物的証拠—UFOの存在を示す決定的な立証物—がないと主張する。

われわれが写真という証拠を持つことはたしかだが、大抵の場合それは間接的証拠なのである。くり返すがUFO現象は、疑いなく本来それにそなわっていて、しかも性質そのものに関連のある、捕えがたいという特色を持っている。もしわれわれが暫定的仮説としてUFOが単に地球の技術を超えているばかりか現代の地球の技術とは異なる技術の産物だとすれば、UFOは実際には航行の、物的、証拠をあとへ残さないということになる。ここに素材きわまりない質問がある。「UFOが機械だとすれば、なぜナットやボルトを落とさないのか？」この質問は先般米航空宇宙局の或る有名な科学者がバルセロナを通過したときに発したものである。(FSR編者注)米航空宇宙局の宇宙船からナットやボルトが落ちたら天宇宙飛行士を助けたまえ—)また次

のような質問も出した。「UFOが存在するのが確実ならば、なぜわれわれはUFOの電波信号をキャッチしないのか？」

この二つの質問は人類のなかで最も素朴な人によって発せられている。二つともこの宇宙には「ただ一種類の『機械』しか存在しない」かまたは「ただ一種類の長距離交信法しか存在しない」という推定から出発している。英国の偉大な科学評論家アサー・クラークは「すばらしく進歩した科学技術は魔法と大差はない」といつている。十六世紀の人間にとってテレビジョンは魔法と思われるだろう。現存する少数の原始人にトランジスタラジオが魔法のように見えるのと同じである。

ここにおいてわれわれが変えねばならないのは、「機械」の概念そのものである。われわれはまだ十九世紀の機械の概念に基づいているのだ。サイバネティクス(人工頭脳学)と情報理論は、蒸気エンジンで始まった古い十九世紀の概念とは全然関係のない機械の概念の方向へ道を指し示している。小型化や生物学とつながる—生物学がなぜいけない?—エレクトロニクスが圧倒的な役割を演じるこの新しい概念を基礎として推定すれば、われわれは単なる機械よりもむしろ、「生物」の性質を持つと思われる、「機械」の思いもよらぬ概念に到達することになる。そうなるはず第一に、たとえばUFOは飛行機が飛ぶような場合には飛ばないといふのに、そしてわれわれによく知られている地球の機械的構造的特徴はUFOの製作とは全然関係がないというのに、UFOの飛行中に一体どこでナットやボルトが落とされるだろう?

さて冗長だけれども述べる必要のあったこの脱線から本題に返ることにしよう。

問題はすでに述べられたので、一つの「理想的な」実例を設定するとすれば、それは少なくとも具体的な証拠書類調べと結びつくものとなるだろう。できればさまざまな出所と、加うるにまじめなことで通っているいろいろの目撃者の証言から出た実例がよい。しかもUFOの着陸によって残された「物質的」証拠があればなおよいし、UFO自体から出た物質があれば最もよろしい。

米国のブルー・ブック・プロジェクト（注||空軍のUFO調査機関）の記録は「未確認」としてラク印を押された無数の実例を含んでいて、それらは右に示された各証拠の一つだけは含んでいゝる。ほんとうに理想的な実例というのは右の各証拠すべてに結びつく実例となるだろうし、加うるにリーダーによる探知、電磁的な影響の発生、物体の近くの「居民」の観察等が伴うものならなおよいだろう。

リーダーによる探知や住民の観察は別として、この記事で扱われる実例は右に示されたあらゆる特徴と結びつくものである。これらの特徴を集めるとスペインのサン・ホセ・デ・ヴァルデラスの事件が浮かびあがるが、これは記録に残っている最もすばらしい事件の一つである。しかもこの事件においては各種の証拠が互いに確証し合っているのである。

#### アルーチェの着陸事件

サン・ホセ・デ・ヴァルデラスの事件より約一年半前に、きわめて興味深い別な事件があった。一九六六年二月六日に、マドリードの郊外アルーチェで、一個の大きな円形のUFOが午後八

時から九時までのあいだに短い着陸をやり、それが近くの弾薬集積所にいた一団の兵士たちに目撃された。

その物体はヴィセンテ・オルトウーニョ氏にも目撃されたが、彼はラファエル・フィナ通りの六階のアパートの窓から見たのである。カシルダ・デ・ブストスからマドリードへむかってドライブしていたホセ・ルイス・ホルダン氏も見た。パルセロナのポルケ（理由）誌一九六六年二月十六日号はこの事件の記事を掲げてホルダン氏の住所を報導した。そこで私の仲間であるエウヘニオ・ダニャンスがホルダン氏に手紙を出して詳細を尋ねたのである。ホルダン氏の長たらしい回答はFSR誌一九六六年五月・六月号に掲載された私の記事「マドリードの着陸事件」の主要部分を形成する。

要約すると、ホルダン氏は一個の白い円盤が接近するのを見たのである。色は黄色とオレンジに変わった。彼は停車して車外へ出て頭上高く浮かんでいる物体を見つめた。見かけの大きさは車のハンドルくらいで、彼の前方のどこか一点へ降下して行った。目撃者は車へもどり、飛行場付近の着陸場所と思われる所へ車を走らせた。現場へ到着してみると円盤が急速に上昇するのが見えた。それは直径十ないし十二メートルくらいで、一定のかすかな振動音を出していて、恍惚たる光輝を帯びていた。すると突然あたたかも、飛んで行った。かのように消えてしまった。

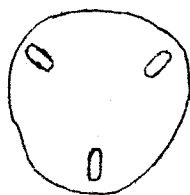
目撃者は物体の下部から出ている三個の「突出物」を見ている。それは第1図かまたは第2図のようなもので、下部の平面図は第3図のようになる。全体の見取図は第4図の如きものである（上部は通過の際に見えなかった）



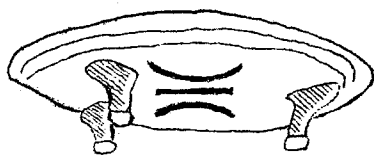
第 1 図



第 2 図



第 3 図



第 4 図

ホルダン氏は付近の家(エル・レラハル園のマンション)へ体験を話しに行った。

目撃のあとホルダン氏は自分の見た物について全く思い悩まされたので、みづから調査者となってテープレコーダーを携行して判明した限りの同事件の証人すべてを訪問した。ヴィンセント・オルトゥーニョ、マリアーノ・デ・ラス・エラスとその友人たち(酒場パレンシアの人。ここで例の兵士たちが体験を興奮して話合っていた)、エル・レラハル園のヘルミニア・ペラエス夫人等である。彼女の夫はホルダンが夫妻に目撃を報告した夜、彼を狂人だと思っていた。ヘルミニア夫人がホルダンに語ったところによれば、事件当時にテレビのスイッチを入れたけれども、わけのわからぬ理由で画像が出なかったとのことで、電燈は異常なかったという。

そういうわけで一年四ヵ月後、正確にいえば一九六七年六月一

日の夕暮時にサン・ホセ・デ・ヴァルデラスで異常な事件が発生したとき、あの第一回の事件に近い関連のありそうなこの第二回目の事件について、見出し得る限りの目撃証人を調査するためにホセ・ルイス・ホルダンは早速出かけたのである。

サン・ホセ・デ・ヴァルデラスは大きなアパート群から成る超近代的な住宅地区の一つで、マドリードの極端な膨張につれて出現した地域である。サン・ホセ・デ・ヴァルデラスとエストレマドゥーラ高速道付近には牧場や雑木林を含む田園地帯があるのは幸運なことだった。事件はこの地域の一つで起こった。ヴァルデラス侯の古い城壁がシムエットとなってそびえている(現在この城は神の愛教団の修道女によって経営される学院として使用されている)。数名の人々が六月一日の夕方の新鮮な空気を吸ったり、くつろいだり、新聞を読んだりしていた。そのときみんなは突然奇妙な円形の物体が城の上をすれすれに現われるのを見た。それは約十二分間そのあたりの上空を飛びまわっていたが、あまり低く飛ぶので木々の頂上に触れるほどだ。木の葉のような奇妙な運動でひらひら舞い、ついにエストレマドゥーラ高速道の方へ消えて行った。この物体は典型的ないわゆる「空飛ぶ円盤」と同じであるように思われた。それは直径十二ないし十三メートルの完全な円形で、二個の洗面器をくぼんだ側を内側にして重ね合わせたように見えた。下部には不思議な記号「アルーチェ」で見られたUFOについていた記号にきわめてよく似ていた「ア」があったが、タテ線のまん中が横線でないのだ。「長方形の中に十字架があるみたいでした」とホルダンがテープを取った一婦人は述べている。彼女とその息子も物体を見ている。「弁当入れのよう



した・・・またはすぐく大きなチーズみだったわ」と彼女はいう。一方地元の酒場では次のようなユッケイな話が交わされていた。典型的なマドリッド印のユーモアである。「あの記号か？ああ、ありゃあマーシヤン（火星人）を意味するMの字だよ」（注：表紙写真を参照）

エストレマドゥーラ高速道に沿って飛ぶ物体を見た一人のエンジニアは、それを、古い自動車のギアボックスにたとえている。いかにも目撃者自身の技術的性質にふさわしい表現だ。物体の外観の評言に関するこうした相違は、目撃された物の客観的存在を否定するどころかそれを確認することになる。その相違は目撃者の種々の特質、すなわち職業教育、家庭的背景等によるのである。単なる主婦が家庭用品にたとえたり（弁当箱、チーズ等）エンジニアがギアボックスのような技術的比喩を出したりするのは当然である。懐疑派の人は目撃者によって行なわれる陳述のあいだに一致点がほとんどないと主張したが、たとえば自動車事故の例のように、ジェームズ・ムクドナルド教授はきわめて賢明にいつている。「詳細点の説明は異なるだろうが、全体の性質の説明は異ならない」こうなれば二台の車の衝突の例において目撃者はまさか自分の見た物はウバ車を變うサイだったとはいわないだろう。つまり目撃される物が空中を飛ぶレンズ状の物体である場合、目撃者の説明には一定の許容範囲があるのだ。たとえ目撃者は正確ではないにしても飛ぶ象を見たとはいわないだろう。

さて、エストレマドゥーラ高速道の方向に消える前に例のUF0は十二名の人に見られたばかりでなく、少なくともその内の二

人によって写真に撮影された。あのととき草地の上に横たわっていたガールフレンドの写真を撮っていた一人の青年は、ただカメラを上になめて、まさに視野の中を通過していた思いがけない物体の写真を撮るにはシャッターボタンを押し続けるだけでよかった。匿名のままこの撮影者は翌朝ドクトル・エスケルド通りの或るDP屋へセンセイショナルな写真の沢山のネガを持って来た。これがあらかじめ電話をかけておいたインフォルマシオーネス紙の写真記者アントニオ・サン・アントニオの注意をひいたのである。フアリオルスがサン・アントニオからもらったのは五枚のネガだった。もつとあると私は見ているのだが！。

この匿名の若い技術者から六メートルばかりの所に、やはりUF0が通過するのを見た男とその妻と娘がいた。若者が写真を撮り始めたのを見てこの男もカメラを持っていたのを思い出し、急いで取りに走り、UF0をねらって撮影を始めた。しかし当然のことながら異様な光景に興奮しきった彼は最初の二枚はレンズキヤップを除くのを忘れて何も写らなかつた。その結果この第二の撮影者は友人や事務所の同僚からバカにされたので、バルセロナの作家マリウス・リエヘットに写真の内二枚のコピーを送ることにした。この作家は「空飛ぶ円盤の神話と実在」と題する著書に自分の住所を記して、興味ある報告や資料を持つ人は送ってくれと述べていたからである。こうしてリエヘットは「アントニオ・パルド」と署名された第二の撮影者から長い手紙を受け取ったが、その中には本人の目撃とサンタモニカ郊外におけるその後の体験の詳細な説明がしてあった。サンタモニカ郊外ではUF0が短時間の着陸をしたらしいが、これは別な話であって、いづれ伝える。

「アントニオ・バルド」はリエヘット宛に長い手紙を書いたばかりでなく、その後まもなくマドリッドからリエヘットに電話をかけて長話をした。ところがわるいことに実にぼんやりした教授であるらしく、リエヘットは相手の住所を聞くのを忘れてしまい封筒の裏側に記してあるだろうと思つたが、手紙には発信人の名はなかった。それで重要な手がかりは失われたのである。ファリオルスと私は相手を探し出そうと八方手をつくしたけれども、すべてむなしい結果に終わった。マドリッドの電話帳には「アントニオ・バルド」という名が沢山出ている。われわれはそのすべてに電話をかけたがだめだった。

さてリエヘット宛の手紙で「アントニオ・バルド」はUFOについて次のようなきわめて興味深い詳細を述べている。

「私たち一同はいつものようにお茶を飲むためにすわっています。妻は編物をしていて、一同は松の木から数メートルの草地の上に腰をおろしていました。ほど遠からぬ所にたぶん六ないし十家族がいて、みなたしかにサン・ホセ・デ・ヴァルデラスから来た者ばかりでした。まだ八時半をすぎてはいません。まだ明るくて、九時頃に義兄妹と食事をするために帰宅する習慣でした。そのとき母親と話していた小さな娘が城の近くを飛びまわっていた物を見つけて叫んだのです。双眼鏡を持って来なかったのは残念でしたが、その構造はかなりはっきりと見えました。たしかに飛行機ではありません。するとそれはゆりイスのように前後に揺れましたが、前方へ進行する気配は全然ありません。すると円形の台部を水平にして静止しました。

次にそれは急速に右方向に動きまわりました—あとで述べるように最

後に立ち去った時ほど急速ではありませんが—。そして更に静止してふたたび前後にゆっくりと揺れ始めました。

一同はよく見ようとして立ち上がりました。付近にいる人たちは私たちよりも先にそれを見ていました。彼らもみな立ち上がっていて、多くの人が両手をかざして沈み始めた太陽の光を避けようとしていたからです。

私たちがいた場所からその物体を完全に見ることができて、日光はさほど邪魔にはなりません。物体を見ていたときの眺望では形が卵形に見えましたが、目撃時は妻にも私にも大きな直径の円筒のように見え、あまり高くなく、その赤道部に相似の円盤形のもの重なってくっついているようでした。しかし娘はそれらしい円盤形のフチを全然見ておらず、チーズを入れるあのよく知られた丸い箱みただったというだけです。写真を見れば妻と私の説明がさほど間違っていないことがわかります。

私にはその物体の上部に銀板またはガラスみたいな輝くものがあるように思われましたが、所持する七枚の写真の内上部を示す唯一の写真は大きく引き伸ばしてもこの特殊な部分を完全に示してはいません。この頂上部について私と同様に証言した別な証人も写真のその部分を認め得ないようです。

その奇妙な機械の行動はヘリコプターのそれに似ているように思われました。もちろんヘリコプターではなかったかという疑惑は全然ありませんが—。

というのはいかなりの時間（私たちはうるたえていたため時間を計りませんし、他の人も計らなかつたのですが、約十二分間だったと思われまふ）物体は城の近くに、動かないで静止して、とど

まっていたからです。

始めの二、三分間私たちは全く夢中になりましたので、カメラを使用することさえ思いつきませんでした。ひょいとふり返るとうしろでカメラを持った男が物体にそれをむけているので、私も写そうと思いついたのです。まだ九枚撮る余裕はありましたが二枚はだめでした。あわてたために愚かにもレンズのキャップを除くという初歩的なことを忘れたからです。

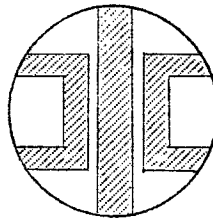
その宇宙船—またはUFOまたは何であるにしても—は突然前後の揺れをやめて下部を水平にしたまま静止し、続いて計りしれないスピードで上方へ飛び立ちました。それは全く驚くべきスピードでしたから、私たちは呆然となったほどです。上昇時の写真は撮ることができません。妻と娘と私は驚いて互いに顔を見つめ合っていたのをおぼえています。円盤が急上昇するにつれてその大きさは見かけ上変化してゆきましたが、それは自然の遠近法効果によるものと思います。最初は飛行機よりも大きく見えた見かけ上のサイズは、青空の中でどぎつく光る淡黄色の硬貨の大きさになってゆき、やがてマドリードの方へ消えてゆきました。

ここであなたの著書に出ている説明に訂正を加えたいと思います。

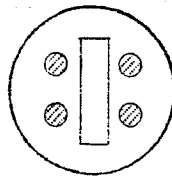
物体の色はオレンジでした。ただし遠ざかるとすぐにひどくぼんやりとして赤味が少なくなつたようでした。これは太陽の反射によるというあなたの説に同意できません。というのは、実際太陽は沈みかけていましたが、物体の太陽にむかっている側には当然金色の色帯ができませんが、それにもかかわらず私たち目撃者全員に物体の周囲全体に一樣の色またはきらめきが見えたからです。

ちょうどネオンランプのようでした。もし夜間だったら物体自体の光ではっきりと見えたと思います。なぜなら当時まだ日中の光がかなりあったにもかかわらず、物体の光輝による輪郭がはっきり浮き出ていたからです。あなたが会ったかもしれない他の目撃者の言葉もこのことを確認するでしょう。

一方、物体の「腹」つまり底部に見られた特殊なマークについて私たちは長時間議論したことをお伝えします。私は次のようなものを見ました(第5図)。しかるに妻と娘は次のような形だつたと主張します(第6図)。



第 5 図



第 6 図

写真が現像されるまでこの点に関する私たちの疑惑は晴れませんでした。それでわかるのは、人間の見た映像がいかに容易にゆがめられるかということ、客観的調査をするのに必要な充分な時間がなければ物体について軽率な判断をくだすのがいかに容易であるかということです。このことは私たち家族と、近くにおいて物体を見た他の人々とのあいだに下部のマークの件で激しい議論が行なわれたことを物語ります。たとえば目撃した一少年は物体の周辺全体にわたっていくつかの窓をはっきり見たといっています。

写真をごらんになれば(すでに引き伸ばしました)どこにもそんな窓はないことがわかるでしょう。

私たちのほとんどすべてが一致した事がありました。それは、かの物体がテスト飛行中の特殊な型の飛行機にちがいないということです。

その夜私たちがマドリッドへ帰るや否や私は空港へ電話しました。するとクァトロ・ヴィエントスとバラハスの両空港にもそのような特徴をそなえた飛行機は全然存在しないということで、そのときは全く驚きました。空港には多数の人や新聞社から照会の電話がかかってきたということで、その事件を上司に報告したけれども上司もそのエピソードを知らなかったそうです。リェヘット氏よ。空港側のこの声明と二日後に私が空港の二名の係員から聞いた話のあいだに矛盾があることにご注意下さい。このことは次に述べます。

私はABC新聞の編集部に電話をかけたが、そこもやはり問題に対して何の説明もできませんでした。

私たちは親友や近所の人たちと夕食後に各自の家に集まる習慣があります。あの夜も集まって事件の討論をやりました。友人たちは(私たちが事件について一同に話した説明から)それはただのヘリコプターだったのだと大ざっぱにいいます。その議論はまことに活発でしたから、私たちはカメラ(F二・八付パセッテ)からフィルムを取り出してフィルムの一部は未露出なのに現像することにしました。友人の長男である問題の少年はかつて写真術に熱中していましたし、立派な引伸機を持っています。それで私はあの夕方撮った写真から二枚のプリント(注||ネガのことか?)

を少年に送りました。私は現像済の七枚のネガを持っています。少年に送ったプリントは最も鮮明なもので、他のものは露出不足です。その結果私は各ネガから作られた非常に立派な引伸写真を入手できました。そのいずれも単独にUFOを示していますが、機体には~~水~~のマーク以外に特殊な物は認められませんでした。

翌日の夕方(六月二日)各種の夕刊紙はUFOの記事を載せました。同じ日の朝、仕事の同僚とUFOについて二度目の議論をやりましたが、皮肉な言葉で私の説明に感謝しましたので、これ以上嘲笑をこうむらないように、今後はだれにも話すまい、そして事件に関する徹底的な証拠を集めようと思心しました。或る新聞は目撃した者は(沢山いたのですが)幻を見たのだと皮肉に述べていました。リェヘット氏よ、この種の状況下であれば他人の笑い草の的になるのを避けるために沈黙を守らざるを得なくなる社会的理由があることはおわかりでしょう。

この目撃事件が発生して一年後にラファエル・ファリオルスとその共同研究者アントニオ・リョベットは平面地形や高度等を示す現場の地勢の極端に骨の折れる地形学的調査を行ない、最初の撮影者による五枚の写真と「アントニオ・パルド」の撮った二枚の写真を参考に出来事の発生順序に見取図の作製にとりかかった。この結果はもはや驚くべきものではなかった。というのはサン・ホセ・デ・ヴァルデラス上空にUFOが実際に出現したことを全く完全に確認したからだ。使用された順序通りの写真はUFOが通ったルート of 正確な再現に役立った。もしこれがインチキならその犯人は写真術の名人であるのみならず、洗脳<sup>ワシ</sup>の大家であるにちがいない。多数の人にその地域の上空を写真に見られるよう

な物が飛びまわったと確信させたのだから。

UFO目撃者としてサン・ホセ・デ・ヴァルデラス城内に設立されている修道院の娘たちに言及する必要がある。なぜなら学院のこの修道女たちがフアリオルスとリョベットに次のように話したからだ。娘たちは目撃時に戸外で遊んでいたため、目撃のためにその後まる一週間というものはほとんど授業にならなかったという。円盤を見た娘たちの話でひき起こされた騒ぎはかくも大きかったのである。

### 着陸と物的証拠

すでに述べたようにUFOはエストレマドゥーラ高速道に沿って飛んで行ったのだが、その道路では多数の人々によって目撃されており、そのなかには後にホルダンがインタヴェューしたエンジニアールもいる。その後まもなくして、オレンジ色に似た強烈に輝く黄色のUFOがサン・ホセ・デ・ヴァルデスから一直線に四キロばかりの所のサンタモニカ郊外の空地に少時着陸したのである。ラ・ボンデローサという名のレストランの近くに降下したので。

このレストランの所有者はアントニオ・ムニョス氏で、着陸時にはハシゴに昇って中庭のまわりを色電球にヒモを通しており、コック長がハシゴを押さえて手伝っていた。すると突然沢山の人が中庭になだれ込んで来た。みな同じことを口走っている。つまり彼らは一個の巨大な火の玉を見たといひ、特に数名などは頭上を通過してから着陸するために三本足を出しているのを見たという。庭へ入って来た人々の最初は連れがなかったという男で、プラ

ド・デル・レイ道を車で走っていた。かなり高地に建っているスペイン・テレビ会社(TVE)のスタジオの前に来たとき、前記の火の玉が遠くに降りるのを見た。料理店主のアントニオ・ムニョス氏はこの一番乗りの紳士の話をまじめに受けとらず、ハシゴを降りて話を聞こうとはしなかった。だれも自分に注目しないのを見て、この紳士は残念そうな顔をして出て行った。

彼が出るか出ないかのうちに二人の青年と二人の少女が入って来た。少女たちは互いに抱き合って泣いている。四人が極端に興奮しているようだ。彼らがムニョス氏に語った話によると、四名はやや暗い人気がない場所にいたが、そこで円形の赤い物体を見た。それは一回の頭上を飛んでちょっと地面に接触したあとふたたび飛び去ったという。

この時までムニョス氏はハシゴを降りていた。そして二人の青年と二人の少女が話を終わらせたときに中年の男とそれより若い女が入って来たが、女は極度の恐怖を示していた。女よりは冷静な男が若者たちの話した内容とよく似た話をし、おまけに大文字のHに似たマークを下腹部につけていた物体の画を描いた。

次々と多くの目撃者に出会ったムニョス氏は始めの疑念が薄れてきて、何か異常な事が実際に発生したことに気づいた。後にフアリオルスに説明したように、このさまざまの目撃者の驚きは偽りではなかったのだ。目撃物についてはみなが確信をもって話すのである。彼は翌日、着陸したといわれる現場を見に行こうと思ったが、仕事のためにマドリッドへ行く必要が生じた。それで目撃者たちから現場を見に行つたといわれる人は実は彼ではなくてその義弟である。義弟は現場で長方形の跡(複数)を発見したが

(アルルチエの跡と同じ形と大きさである)、それらは一辺がメートルを少し越える正三角形の各頂点となっていた。

#### ニッケルのパイプとプラスチックの小片

さて、すでに多くの点でわれわれを不可解にさせるこの事件のうちで最も不可解な部分に入ることになる。着陸現場で不思議な金属製パイプ(複数)が発見されたらしいのだ。これらは長さ十五センチ足らずで、見たところ機械の部品らしかった。着陸後数日してからムニョス氏とその地区の多くの実業人は「エンリ・ダグ・セット」と署名された奇妙なチラシを受け取ったが、それには次のように書いてあった。— UFO がサンタモニカに着陸した。そのUFOすなわち空飛ぶ円盤が金属のパイプを落としかつたことをスペインの新聞で知り、そのパイプについて科学的な興味を持つので秘書のアントワニス・ナンシー嬢へパイプを送ってくれた人にはダグ・セット氏が代表する団体の名でもって一万八千ペセタを差し上げる。宛先としてマドリードの或る郵便私書箱の番号が記してあり、六月十五日までに送れとあった。そのチラシには一本のパイプの写真と寸法を記入した図面も添えてあった。

このチラシを受け取った人々のなかにもう一人の着陸目撃者がいた。この人はコロニア・デ・サンタモニカのセダノ通り三三に住むマヌエル・リヴェロという名の実業家である。更にその隣人エウヘニア・アルビオール・デ・アロンソ夫人もカンポ・フロリド通り四号のアパートの二階の窓から着陸の完全な場面を見た。この奇妙な小パイプに関する話がスペインの新聞に取り上げら

れた。そこで「アントニオ・バルド」はその件を調査するためにサンタモニカへやって来た。そして運のよいことに、偶然にそれを見つけてベンチでこじあけたという少年からパイプの一部を安価に入手した。少年の話ではパイプを開いたとき液体が出て蒸発したという。パイプには見たところプラスチックの緑色の小片が入っていて、それには例のUFOの下腹部のマークに似た奇妙なマークがついていた。

「アントニオ・バルド」は小片の一つと一個の金属製パイプをリエヘットに送り、リエヘットがそれをファリオルスと私に渡した。そこでわれわれはそれをマドリードのINTA(スペイン国立航空宇宙技術院)の研究所へ送ることにした。INTAはそれを分析して詳細な報告を送ってくれたが、それによれば金属パイプは異常に高純度のニッケルで、プラスチックの小片はポリビニール弗化物だが、まだ市場で入手できないタイプのプラスチックだという。この問題に関する技術文献を調べた結果、現在すでにこの材質はデュボン会社の米国工場だけで作られていることが判明した。これは同社の試験工場で作って米航空宇宙局へ納めていたのである。航空宇宙局はこれを人工衛星の尖頭に覆いとして用い、大気との激しい摩擦をよけるのだ。このプラスチックはすばらしい性質を持ち、ひどく長持ちし、腐食作用による損傷を受けないからだ。

以上がサン・ホセ・デ・ヴァルデラスの事件の大まかな輪郭であり、驚くべき結果である。

あれは一体大気圏外から来た宇宙船だったのだろうか? 時だけがこの疑問に答えるだろう。だが一つだけたしかなことがあ

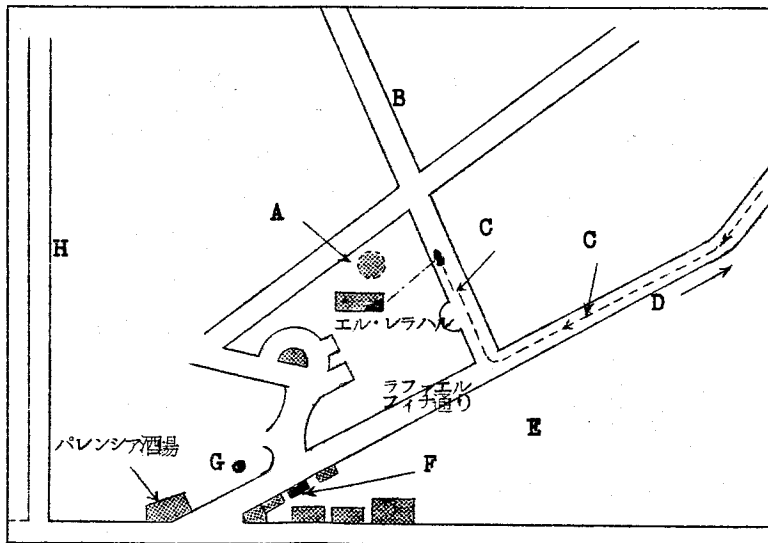
る。つまり物体はまさに「そこにいた」ということだ。なぜならこれこそ目撃者たちの最も完全な正直な言葉と写真で示される驚くべき確証から引き出し得る唯一の推論であるからだ。

△FSR誌編集メンバー、パーシー・ヘル注▽

私は今年六月にスペインを訪問中、リベラ氏とフアリオルス氏に会い、この二人の紳士に大そう好感をもってイングランドへ帰った。私が見た写真(複数)は「何物か」を撮った真正の写真であったということが出来る。ネガは見なかったがプリントは粒子が見えるほどに伸ばしてあり、その段階においてはインチキを隠すことは不可能である。

下段の図はアルーチェ着陸事件の二人の主要目撃者の位置を示す。

- A UFO着陸の大体の位置
- B 空港施設へ通ずる道
- C ホルダン氏の車が走ったコース
- D カシルダ・デ・ブストスへ通ずる道
- E アルーチェ住宅地
- F オルトワーニョ氏の家
- G 給水所
- H カラブンチェルへ通ずる道



## 或る不思議な体験とUFOの科学

村雨光之介

### 1. 或る不思議な体験

ソ連の第一人工衛星一九五七年αが上がった頃の事である。當時失恋して意気消沈していた私のノートの余白に、次の様な通信文が書かれてあるのを突然発見した。

「それだけの半発見をした貴方にしては……早く火星にいらっしゃい。火星は芳香と花の国です。火星ではエネルギー状態が小さい為に、私達は大事業が出来ませんけれど、それでもあれだけの運河を作って、友星の御友達を御待ちしています。でも火星は楽しい国ですよ。地球の快樂とは違った意味での楽しさね。光の世界に入った貴方には解ると思いますけれど」「一生懸命勉強しき、光の波に乗って御國を訪れます」「淋しい時には、目をつむって下さい。何時でも貴方の許に参ります。今夜はここまでではまたね」

私は東大教養学部二年に在学中にて、ポテンシャル軌道と言うアイデアをいじり廻して居た時の事である。冒頭の半発見とはそれを指す。下宿には女子中学生が一人居て、その娘のいたずら書きにしてはAエネルギー状態VとかA地球の快樂とは違うVとかの文章が出来過ぎて居た。また多感な青年期の事にて、真の愛情を持つ女性の言葉に対しては、鋭い直観力を有して居た私は、真の火星の女性が呼びかけて来た事を悟った。リモートコントロール

ルか何かで書いた物であろう。筆跡も地球上では見られぬ物であった。終りの方のA勉強しきVとは、日本人ならばA勉強してVと用いる所であろうけれど、助詞の用法に習熟して居ない異国人の言葉を思わせて魅力的であった。純真な私は勇氣百倍して宇宙機の原動力の探求に乗り出した。最高学府とは言え、五、〇〇〇年進歩して居ると称される火星の学問に比較すれば、古臭い学識の通用していた学園の事とて、指導者も無かったけれど、こつこつと刻苦勉強した。その時巡り合ったのが久保田氏訳の『空飛ぶ円盤同乗記』である。この本により太陽系には、地球より遙かに進歩した人類が栄え、不思議な宇宙機が飛来している事を知った。当時の私は通常の科学者と同じく、火星には下等な生物程度しか存在せぬとの通念を有して居たけれど、あの本はともウソとは思えなかった。また一方ではアインシュタインの如くA一般相対性理論Vが出て、重力場の一部分の概念が明確にされては居たけれど、これでは宇宙機の挙動をとても解析出来なかった。私はあの本の冒頭の写真を眺めつつ、このメカニズムが解れば、重力場の性質も解明される筈であると秘かに考え、その宇宙機を駆って火星の彼女を訪れる日の自分を夢見た。豊田佐吉は外国織機の前に三日も頭張って、そのメカニズムを見抜き、その技術を導入したと言う。私も宇宙機の写真と、アダムスキーの残した図面と、にらめっこの毎日が続いた。最初に着目したのは三個の球（アダムスキーは、着陸用ギヤーと呼ぶ）である。地球上では三相誘導電動機が普及して居て、そのコイルは三個対称に配置されて居る。宇宙機の場合は、球が三個対称に配置されて居た。球型コンデンサーの容量を示す公式は易しいので、それとマクスウェル方程式



を組み合わせて解析した。私は地球流に磁場が回転して居ると考えたけれど、先輩の桑原洋氏（東大電気工学科卒。現日立国分工場計算機制御設計部勤務）は、球型コンデンサーに高周波三相交流を充放電するのだと指摘された。それから先は解らなかつたけれど、これで眼前がパツと明るくなり、急速に解析が涉った。今以って、その後の発展は、氏の一言に負うて居ると深く感謝して居る。後になり、地球の技術は、電磁場テンスルの空間成分である磁場の応用機器が、時間添字にも関与する電場の応用機器より圧倒的に多く、その為に四次元の超技術の発展が遅れている事が解るけれど、然しながら、パワーコイルの秘密は容易に解らなかつた。その間、私のアイデアを徹底的にけなした東大講師が、湖で変死する件も有ったりして、天の摂理は熾然として行われると感じたりもした。

彼女の言い残した如く、淋しい時には目を閉じて宇宙遙かの彼女を想い起し、また奮起して解析を進める日々が続いた。

然し難解なパワーコイルの秘密も遂に解ける日が来た。

△スピン波の方程式Vが発見されたからである。これは一九六五年の物理学会に発表され、大きな反響をまき起した。その重力側面はテレパシー研究誌△テレパシー第一〇号Vに△反重力Vとして発表してある。そのコイルは、スピンの循環の統計力学的制御機器であった。こうして次第に宇宙機の全貌が明らかとなり、△反粒子機関Vなる原動機が、先進文明惑星では常用されている事が判明した。彼女が△光の波に乗って御国を訪れますVと呼びかけた裏には、この様に深い哲学的背景が有ったのである。△反粒子機関Vは、裏から言えば△時間反転原動機Vであって、時間

反転点に近づく様子は、実験にてオシログラフに現われて居る

これは八月の国際学会で発表される。母校の寮歌に△尚武の風を帆にはらみ、舟出せしより十二年・・・Vと有るけれど、正に十二年目にして正しい結果に到達した。理論的解析のみ（と一部分の実験）に、こんなにかかってしまつて、彼女は△見込んだ程にもないわVとしびれを切らして居る事である。真に不甲斐無けれど、それでも現在の化学ロケットに比較すれば△反粒子機関Vは遙かに優れた物である。確実に火星に到達しそうであるけれど、十二年も経て居ると、彼女もあきらめて結婚して居るかも知れない。私も多少は浮気もしたから、その方が心苦しくない点もあるけれど、あの本に依れば、宇宙人はウソをつかぬから、本当に待って居る可能性がある。嬉しいけれど真剣な悩みではある。

（昭和四十四年七月二十二日記）

## 2. UFOの科学

人類の月世界着陸も実現して、宇宙時代も本格的な試練の時期を迎えた様です。月迄は約三十八万三千八百キロメートルですが、次の目標である火星や金星は、軌道上の位置にもよりますけれど、平均二億キロメートルもあります。従つて、月の次のステップを昇るのは容易な事ではなくて、NASAの計画に依りましても、有人火星飛行の出發は十二年後となつて居ります。さてそこで、宇宙時代最大のナゾと称されて居りますUFOの推進機構を平易にかつ科学的に説明して、彼等の優秀な技術と深い哲学を習得するのは、有益な事でしょう。ウラニデス（文獻一）の宇

一 宙機の推進原理は、前回（文献二）にも述べましたけれど、次の基本原理に基づいて居ります。

一 (1) 反粒子（例えば陽電子）の重力場は、反発重力（文献三、四）である。

(2) 核電気共鳴（文献五）に依り反物質場を創生し保持する。

(3) 従って、その反物質場は、足場の重力場から反発される。その方向は共鳴磁場の方向（文献六）となる。

(4) パワーコイルで限られる円筒の内部が正孔（文献七）となり、その内部に乗員及び制御装置を収め、対消滅（文献八）から免れる。

(5) 反粒子場であるから、パワーコイルの外部は、地球大気中を航行する際は、空気分子と対消滅を行い発する。これが通常UFOが赤や緑に美しく光る理由である。またUFOの周囲は対消滅の為真空状態となり、相当に厚い真空の境界層（文献八）が出来る。

(6) 従って大気中を航行する際も真空中とあまり差異の無い高速度を得る。

以上が基本原理でしょうけれど、仲々に深い哲学に立脚した手法ですから、もう少し砕いて解説致しましょう。まず反粒子Vですが、これは負エネルギーを有する粒子を総称致しまして、その静止質量を $m$ と致しまして、アインシュタインの關係は

$$W = -mc^2 / \sqrt{1 - \beta^2} \quad (1)$$

となります。例えば、陽電子、反陽子、反中性子、反中性微子及び反K中間子等があります。中には、粒子と反粒子が同じ物であ

る粒子（光子、パイゼロ中間子）も有ります。この場合は、偏極すると区別出来る様になり（文献九）、例えば右偏光子の反粒子は左偏光子です。社会は男性と女性のほぼ半数宛より成り立って居りますけれど、宇宙も粒子と反粒子が半数宛より成り立って居ります。それはA対発生V（文献十）と称しまして、粒子が生れる時には、必ず反粒子を伴って生まれるからです。即ち粒子と反粒子は必ず同数生まれます。消滅する時も同様でして、必ず両者が対になって消滅します。これをA対消滅Vと称します。然し、我々の周囲には、反粒子は存在致して居りません。それは後述する様に、反粒子の重力は反発力（反重力）でありまして、地球の近傍で生れると直ちに反発されて外宇宙に逃れます。逆に存在せぬ事から、反粒子の重力場は反発場である事も言える訳です。反発重力場を示す方程式は、古い物ではアインシュタインの方程式

$$T_{\mu\nu} = - \frac{8\pi k}{c^4} T_{\mu\nu} \quad (2)$$

があります。 $\rho^{\circ}$ 、 $k$ 及び $T$ は、各々重力時空の歪みを示す計量、ニュートンの重力定数及びエネルギー密度です。(2)の右辺の $T_{\mu\nu}$ の正・負に依り、 $\rho^{\circ}$ は各々負・正となります。これから次の三段論法に従って、反粒子の重力場は正（反発）となります。

(大前提) (2)の式により、負エネルギー重力場は、正エネルギーの逆の性格を持つ。

(小前提) 正エネルギー重力は引力であった。

(結論) 従って負エネルギー重力は反発力である。

ここまででは地球の物理学の古典的理論で導かれる訳です。この外、スピン（全角運動量）波の方程式（文献四）からも同様に結

論されます。即ち、反粒子場を創れば、極く自然に地球重力場から反発されまして、飛行出来る訳です。

それには多少技巧を要しますが、核電気共鳴(Nuclear Electric Resonance)なる手法で、物質を反物質に変換致します。

核磁気共鳴(NMR)なる分野が物理学に存在しますけれど、その対応分野として前者が存在します。即ち磁場と軸性スピンの相互作用を扱うのがNMRですけれど、電場と極性スピン(文献十一)の相互作用を扱うのがNERです。

極性スピンの向上きの時は、粒子のエネルギーは正、下向き時は負です。

粒子は必ず極性スピンを有し、正・負のエネルギー状態を往復振動しております。平均として正のエネルギー状態に有るので、従って、電場で、極性スピンを下向きにして、負の振動成分を勝たせれば、反粒子状態に移行出来る訳です。もちろん、その際にはエネルギーの出入を伴います。

極性スピンを下向きにする条件は、電場の回転数を $\Omega$ 、鉛直方向の共鳴磁場を $H_0$ として

$$\Omega \sqrt{dH_0 + Q} \tag{3}$$

となります。 $\Omega$ はギヤイロ磁気定数と称しまして

$$\Omega = -ge/me \tag{4}$$

で表わせます。 $e$ 及び $m$ は、単位電荷及び電子の静止質量です。

$g$ は核 $g$ 因子。 $g=1$ の時 $d = -1, 8 \times 10^7 / \text{gauss} \cdot \text{sec}$ .

です。標準の電磁材料は $10^3$ の程度です。回転電場を創り出すには、前回(文献二)の図面に示したように、三個の球型コンデンサーに、三相交流を充放電するのです。

着陸用ギヤーと俗に称されて居るのはこれです。ギヤーとは機械工学の用語でして、従来の内燃機関がその分野の製品ですから、アダムスキーはその用語を用いたのでしょう。正確には電子工学系の部品でして、コンデンサーである点は、前回にも指摘致しました(文献二)。さて(3)の条件で、一個の原子の場合には、正確に反原子に移行しますが、チタン酸バリウムプロックの如き多粒子系の場合には、熱統計力学的制御が必要となります。それが前回(文献二)のパワーコイル(ロックコイル)です。これに依り、スピンの循環を保持致しますと、一千万ガウス程度で殆どの原子が反原子に変換されます。例えば、一万ガウス程度ではほんの百万個の中の一つが変換されるのみです。その際機体に流れ込む重力場のエネルギー流は

$$dw/dt = \Omega mc^2 \tag{5}$$

となります。但し $\Omega$ 及び $g$ は、量子種子(チタン酸バリウムとフエライト)の静止質量と重力加速度です。それに対応して、ロックコイルに生じる誘起ポテンシャル $\psi$ は

$$\psi = -dmgL_0/c^2 \tag{6}$$

となります。(5)は $H=10^8$ グラム、 $g=980\text{cm/sec}^2$ と致しましても、三百万キロワット(約三百万馬力)にも達しますが、(6)の方は、ロックコイルと、機体の重心を通る鉛直無限遠直線と

— 26 —  
 の相互インダクタンス  $L_{12} \approx 10^{-2}$  と致しなくても、 $6 \times 10^{-3}$  V 程  
 度に過ぎません。  $E = 10^6$  グラム (トーン) で、始めて  

$$\psi \approx 6 \text{ volt} \quad (7)$$

程度となりまして、抵抗の低いコイルにフィードバックすれば、  
 有効なロック磁場 (文献十二) が得られます。

これが UFO は或る程度大きく作らなければ実用にならぬ理由  
 です。然しながら、一、〇〇〇キログラムのフェライトとチタン  
 酸バリウムを焼結するのは、仲々に困難な事です。小型機は、微  
 分磁場と称する方法を用うるでしょう。また推力は  $10^3$  キログラム  
 の量子種子に対しては、同重となります。但し、その場合、重力  
 の減速は働きませんので、純粹に  $10^3$  キログラムで反発されます。  
 然し、コイルその他の制御装置には、通常の重力が働きますので、  
 機の加速度  $\alpha$  は

$$\alpha = (M-m)g / (M+m), \quad (8)$$

となります。但し、 $M$  及び  $m$  は、量子種子及びコイル等の静止質  
 料です。即ち、 $E \wedge \Sigma$  ならば、機体は重力ポテンシアルの井戸か  
 ら逃れます。

因みに、所題のエンジンは  $\wedge$  反粒子機関  $V$  と称するのが本質的  
 に正しいでしょう。反粒子の反重力を推力に利用するからです。

最後に、重力を用いた推進方式で、本質的な事実に触れて置き  
 ましょう。それは速度が上昇致しますと、機体と量子種子の質量  
 は相対論的に

$$M = M_0 / \sqrt{1 - \beta^2} \quad (9)$$

$$M' = M_0 g / \sqrt{1 - \beta^2} \quad (10)$$

の如く、それに応じて増大します。これは化学ロケットの場合に  
 は見られなかった事情です。従って、遂には光速を越えて、第一  
 超平面 (文献十三) の存在となります。その事情は拙著  $\wedge$  超相性  
 理論  $V$  に触れて置きました。UFO の突然の消滅は、第一超平面  
 の存在となることなのでしょう。

最後に、第二次大戦中に  $\wedge$  零戦  $V$  が盛んに活躍致しましたけれ  
 ど、UFO も日本で実作すれば  $\wedge$  零戦の平和なる後継機  $V$  として、  
 名を馳せることになりましょう。更に、反重力の生じる過程が、  
 シンクロスコープ上に示されます。即ち条件に適った周波数で模  
 型を駆動致しますと、写真 2 の如き電磁波が画面に現われます。

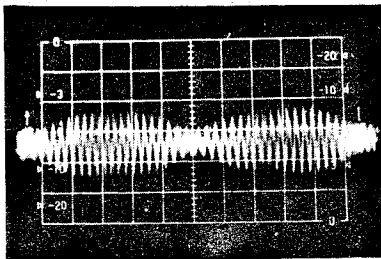


写真 1

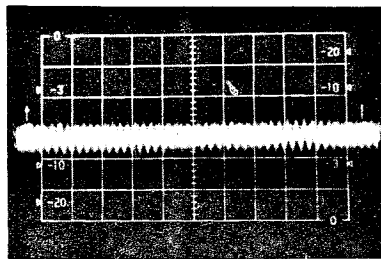


写真 2

これは非駆動時には、写真1の如き物であったのが、この様に減衰したのです。この過程を更に進めて行くと、やがて振巾は0となり、次には時間反転した波、即ち以前の山が谷、谷が山の電磁波が現われましょう。ここよりむしろが反重力の領域です。この模型実験は大体次の程度の費用で出来ます。

A	チタン酸バリウム振動子	一万円
B	球型コンデンサー(三個)	五千円
C	フェライト振動子	五千円
D	コイル類	五千円
E	フェライトリング	三千円
F	三相交流電源	一千円
G	シンクロスコープ	六万円
H	クリップ、ジャック類他	二十円
合計		九万一千円

希望者は、御問合せ下さい。

参考文献

- (1)柴野拓美「科学読売(一九五九年八月)」(2)清家新一「日本G A P ニューズレター第三八号(3)P. A. M. ディラック「ザ・プリンシプルズ・オブ・クァンタム・メカニクス」(オックスフォード大学出版部(4)清家新一「テレパシ」誌第十号(5)清家新一「日本物理学会第二年会抄録第五部・今年年会抄録(6)清家新一「第一九回応用力学連合講演会抄録(7)の二七五頁(8)の二七三頁(9)梅沢博臣「場の量子論特論(岩波書店)」(10)宮沢弘成「素粒子物理学(裳華房)」(11)清家新一「第一一回宇宙科学技術講演会抄録(12)第「回」国際宇宙科学技術シンポジウム議事録(13)清家新一「テレパシ」誌第九号

近刊！ 超相対性理論

村雨光之介(清家新一)著

¥500(送料は著者サービス)

申込先 798愛媛県宇和島市大宮町1丁目4番12号 清家新一(宛)

ユーフォロジイ(UFO学)の科学的に正確な理解をどうぞ。  
—内容—

第二のアインシュタインと称される著者。限定版に付御予約を。現金書留で。

- (1)ローレンツ不変な全角運動量方程式(スピン波と重力、スピン誘導則、重力場のローレンツ変換、太陽系の3テスト)
- (2)多重調和方程式(三重調和関数、四重調和方程式、多重調和方程式の素解、エネルギーテンソル成分)
- (3)相対論的球関数(6元角運動量演算子、相対論的球関数、極性角運動量の固有値)
- (4)誘電分極量子演算子
- (5)清家・クラマス方程式(4次元のコマの旋回。円偏光電磁場に対する解、制動の有るクラマス方程式)
- (6)状態運動量の従う方程式(状態運動量の電磁氣的挙動、重力減速下の解、第2次挙動と時間の第3次微分、円偏光電磁場に対する解)
- (7)相対論的問題数題(4次元ケプラー問題、インピーダンスのローレンツ変換、第1超平面のエネルギーと固有時)
- (8)量子重量発電(重力エネルギー密度、重力場内の状態運動量の成長、熱統計力学的確率、発電容量)(9)時間反転機(時間反転ラジオ、表から見たエネルギー、負ケルヴィン温度と熱力学第2法則の一般化、実験結果、時間反転テレビ及び超平面レンズ)
- (10) <反粒子機関>(UFO)(反粒子の重力場、核電気共鳴に依るC変換、反粒子機関の推力と出力)

## 第 4 回 日 本 G A P 総 会 開 催

かねて号外で予告したとおり、第四回日本GAP総会が去る九月二十三日に市ヶ谷会館において開催された。この日参加者は総計八十六名に達し、遠く関西方面や北九州から参加した人もあって、終始熱気を帯びた真剣な雰囲気の中になごやかな波動も流れて有意義な楽しい会合となった。

結婚式場として知られる市ヶ谷会館の豪華な二階CD室の正面には宮内温夫製作の横型サインが掲げられ、受付は長い行列をさばくのに忙殺されて、定刻十時をすぎること十分、渡辺利郎の司会により開始。プログラム最初の講演に入り、まず久保田代表が「GAPのあり方について」と題して日本GAPの存在意義について説明し、特にアポロ十一号の結果とアダムスキの主張との関連について意見を述べた。すなわち米ソ両国は宇宙探察の発見内容をかなり秘密化し、事実を公表しないばかりか故意に歪曲して報告しているらしいこと、アポロ十一号の宇宙飛行士らの報告は全くあたりさわりのないものばかりで、事実隠蔽のフシが濃厚であること等を実例をあげて解説し、CAPはあくまでも本来の使命にまい進すると力強く宣言した。続いて安斎純夫が従来行なわれていた東京支部の月例会を主体とした活動について詳細を報告する。そのあと村雨光之介こと清家新一氏が「円盤推進の秘密」と題して反粒子の反重力場による推進方式についてスライドを使用しながら説明を行なったが、高度の理論のため理解は困難であった。しかし清家氏は資

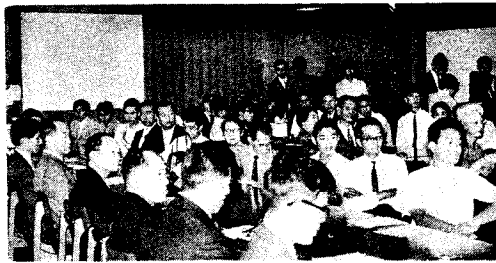
金があつて材料がととのえば必ず成功してみせると断言。続いてご存知リーダーマンこと高橋忠春氏がユーモアに満ちた話しぶりで日本GAPの将来について種々の予言を出し、参加者の好奇心をあおりたてた。氏によれば五年後に日本GAPは都内に大きなビルを持つほどに発展するという。講演のしんがりは神戸からわざわざ上京された巽直道氏のアダムスキの哲学と思念の効用に關する説明で、七十才近い老体とは思えぬほどの堂々たる雄弁は全く圧倒的であつて、この声を聞いているだけでも病氣などは治りそうだと話し合っている人もいた。

これで講演は終わつてそのあと質疑応答に入り、五名の講演者と参加者とのあいだに活発な質問戦が展開されたのち昼食の休憩となつて午前の部は終了。

午後は定刻一時より安斎純夫の司会のもとに開始され、アダムスキの講演録音テープの公開が始まる。アダムスキが十年前にロサンゼルス州の州立大学で行なつた講演の際の質疑応答の部分のみをテープレコーダーで再生し、久保田代表が解説を加えて多大の感銘を与えた。アダムスキの録音テープの公開はこれが最初であるので、予定を変更して五十分開続けた。そのあとスライド映写に移つてニラ沢瀧一郎解説入りテープと共に約七十分になりGAPスライド、円盤スライドの二種類を写したが、迫力あるすばらしいカラーの大画面に一同魅了される。時間変更により午後の休憩を短縮してコーヒーとケーキでノドをうるおしながら参加者全員の自己紹介に続いて再び質疑応答が行なわれて、久保田代表のユーモラスな回答に笑声がうず巻く。やがて別室で全員の記念撮影が行なわれて夕食の休憩に入り、午後の部は終



久保田代表の講演



会場風景

った。こゝらで時間の都合上退席する人々もあったが、五時半よ  
り夜の部に入ってからもお数十名の会員が残って寮囲気は次第  
に高揚してくる。まず高橋忠春氏作詞、梶原景昭作曲の「アポロ  
十一号の歌」が披露される。国立音大の美しいお嬢さんが特別出  
演して見事な歌を聴かせたあと、再度全員の意見発表、質問等が  
行なわれたが、八時に閉会が宣せられ、つきせぬ名残りをとどめ  
ながら散会した。遠路はるばるご参加下さった方や種々ご援助下  
さった方々に厚く御礼を申し上げます。

(ニラ沢記)



最前列の向かって最左端がニラ沢潤一郎、左より五人目から村雨光之介、巽直道、久保田  
代表、高橋忠春、安斎純夫、渡辺利朗の各氏。巽氏の右後は橋本健氏。(全員ではない)

## U F O 観測会を実施

オレンジ色のU F O出現！

日本G A Pは去る十月十日から十二日までの三日間、U F O観測会を実施して多大の成果をあげた。これは宿泊人員に制限がある関係上全会員に知らせず、都内と近郊に在住する幹部（一部会員が参加）だけの内輪の集りであったことを了承されたい。

場所は千葉県今井市養老で、小湊線高滝駅前にある古山晴久氏宅を宿舎として集合した。これはかつて旅館として使用された建物で、十数名を収容できるし、付近には見晴らしのよい高台があるので、ここを選んだわけである。先発隊として水谷進、竹島正、増田幸雄の三名がまず十日に到着し、古山を加えて計四名がその夜観測に出た。場所は宿舎から徒歩十五分の丘陵地で、稲刈りのすんだ広い田の中である。空は晴れてシーイングは良好であった。八時頃から十時頃まで空を見上げて頑張ったが、多数の飛行機と流星以外にそれらしき物は現われず、あきらめて帰る途中、突如怪光体が無音で飛ぶのを水谷が発見して一同は緊張した。見ると北方から東方に向かってオレンジ色の、明るさ金星程度の光体がゆっくりと飛ぶのだ。光の点滅や爆音は全然ない。光体は一度光輝を弱めたが再び光を増して、約二十秒後に空中でパッと消えた。状況を徹底的に検討した結果、これはU F Oと断定。

翌十一日午後四時半には久保田代表以下渡辺利明、ニラ沢潤一郎、山本佳人、宮内温夫、篠木裕二、斎藤雄久、塩谷光男の八名

が到着。斎藤は用事あってまもなく帰り、合計十一名のグループが、炊事当番の作った美味しい食事に舌つつみを打ったあと、八時頃に全員出発。前夜と同じ場所へ行く。空は澄んで見通しは良好。各自双眼鏡、カメラ等をかまえて待機したが、飛行機とわずかな流星以外何も出てこない。夜間の寒気が骨までしみ通るような台地で一同ねぼる内、九時五十分頃に突然北方の空低く明るいオレンジ色の光体が無音で出現して一行は興奮する。目撃結果についてあれこれと評定しているうち、寒さに耐えかねて、カゼをひいている久保田と他の三名は十時頃一足先に下山した。ところが約三十分後に再度同様な光体と同じコースに出現したのを残留者が発見したので、結局飛行機だったのではないかという推測も出たが、爆音がなかったのが不可解であり、結論が出ぬままに全員山を下った。ゆえに第二夜の目撃はU F Oであったとは断言できない。われわれは、かすかな流星の如き物までU F Oとこじつけるようなことはせず、目撃後宿舎に帰ってからも観測会に対する反省会を行ない、遅くまで全員で検討した。観測に関してはあくまでも科学的な分析を行なって、決して神がかりにならないのがG A Pの特徴である。

前夜の疲労のため翌十二日は十時頃まで眠り、午後は討論やテレパシーの実験に打ち興じた。器具にサイコロとトランプのカードを使用した。記録によると実験者の全員が確率以上の好結果を出し、特に山本佳人、宮内温夫は抜群の成績だった。どうもこの二名はテレパシーの能力が強いらしい。代表はカゼのためにこのゲームには加わらなかった。五時に古山他数名を残して帰途についた。これは楽しく有益な行事であるので、今後も度々実施したいものである。

(竹島記)



### 日本GAP大阪支部結成

#### 月例研究会開催

関西方面のGAP会員を糾合して日本GAP大阪支部が結成されているが、ご存知ない方が多いので、ここに更めてお知らせする。すでに市川宏世話人の手により会合を三回も開催し、今後も活発な活動を続けるので、関西方面の会員の方はふるって参加されることを望む。役員、場所、日時は左の通り。詳細は市川代表宛照会されたい。

代表 市川 宏 兵庫県尼崎市東難波町四十一番十一  
顧問 巽 直道 神戸市兵庫区矢部町五三  
補佐 重松昭春 兵庫県豊岡市立野町一一の八

日時 毎月第三日曜日、午後一時より四時まで  
場所 大阪婦人会館 大阪市東区上町二番地  
電話 大阪〇六(七六二)二六五八

- ◎当日会費は100円。
- ◎テレビシーを持参。

◎地下鉄2号線(東梅田―天王寺)の谷町四丁目下車、東へ約四分。  
◎バス 中央出口前の大坂城方面行乗場より出る阿倍野橋行②。  
天王寺駅(東洋信託銀行筋向かい)より出る大阪駅前②または①①①。  
難波(新歌舞伎座前)より出る北清水行⑦⑦。  
右のどれかに乗り上下町一丁目下車。南へ五十米行けばよい。

### 東京月例研究会

#### 十二月より会場を変更

都内世田谷区成城町の中田氏宅で長く続いた東京月例研究会は中田氏が移転されるために十一月をもって打切ることにし、十二月七日(第一日曜日)の例会から左のとおり会場を変えて続行することになった。都内及び近郊の方は気軽にご参加の程を。

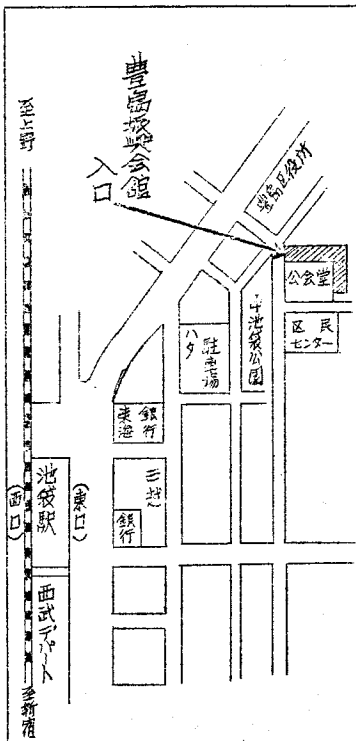
◎例会開催日 十二月より毎月第一日曜日(ただし来年一月だけは第二日曜とするので注意されたい)。  
◎時間 午後一時より五時まで。

◎当日会費 五十円。

◎携行品 死と空間を超えて、ノート、筆記具。

◎場所 都内豊島区東池袋一丁目十九番一号 豊島振興会館、二階小会議室(九八)二二一

注意 国鉄池袋駅東口下車。三越デパートの前から区役所を目標に行くとその裏手側に豊島振興会館の入口がある。その右側が公会堂で、振興会館と公会堂は並んで一組になっているから入口を間違えないこと。逆にいえば公会堂の入口の左方に振興会館の小さな入口がある。池袋駅より徒歩三分。左の地図を参照。



### 編集後記

◎本号には米國で活躍中のシャロット・ブロッツに関する記事を数篇掲載しましたが、これらはすべてシャロットから編者宛に送られた資料の訳文です。彼女はアダムスキーの元秘書で、現在は加州のヴァー・セントターに住み、時折他州へ講演旅行に出てたりしてかなりの活動を続けています。彼女はアダムスキーの著書類(いわゆる原書)の頒布も行なっていますし、機関誌も出していますので、希望者は私宛に照会下さい。注文方法・価格等をお知らせします。

◎「私は金星文字を解読した!」は六年前のF.S.R. (フライイングソーサー・レヴュー)誌に出てセンセーションを起こしたもので、当時は都合により本誌に載せませんでした。アダムスキーに対する一般の関心が薄れてきた現在、この記事は重要な意義を帯びるものとして本号に取り上げました。バシル・ヴァンデン・パীগ氏の現況と住所については目下シャロットに照会中です。

◎「サン・ホセ・デ・ヴァルデラスのU.F.O.」は近着のF.S.R.誌九・十月号に出たトップ記事で、この内容には読者も一驚されるでしょう。大方の読者はこのU.F.O.が米國製円盤であるかの如き印象を受けるかもしれませんが、一方これは真正のU.F.O.であつて大氣圏内外で米國の人工衛星の破片を、押収して地上へばらまいたのだという推論もあります。いづれにしても考えさせる記事です。

◎「或る不思議な体験とU.F.O.の科学」は村雨氏ご自身の奇怪な体験で、氏の話によれば、学生時代には氏も妹さんも円盤や母船型U.F.O.を何度も目撃されたとの由。最近のご連絡に、世紀の模型を浮上させるのはもはや時間の問題であるそうで、世紀の大発明の実現を祈ります。

◎本会の第四回総会は盛況裏に終了して喜びにたえません。ご参加下さった方や役員諸氏に厚くお礼を申し上げます。北九州からわざわざ出席された中村健三氏は、もうU.F.O.研究以外に自分の人生はあり得ないと述べておられました。追求の対象物が何であることも、とにかく追求者としてホンモノになることがまず大切であることを、かつて太宰治が身をもって示してくれたような気がします。

◎日本GAP大阪支部が結成されています。関西中国方面の方はご参加下さい(本誌31頁参照)。高度な哲学やティーンングスの探究において一人で思索するのも結構ですが、ときには同好の士と一堂に会して意見の交換を行なえば意外に啓発されることがあります。第一、ディスカッションのマネーが身につけてよろしい。

◎東京の月例研究会は十二月より会場が変更されます。詳細は31頁をごらん下さい。中田氏ご夫妻の多年にわたるご奉仕に深甚の謝意を表します。

◎アダムスキーの著作の中で最も重要なのは「生命の科学」であつて、米國GAPはこの書を最重視しており、この中に述べてある哲学といえは難解そうに聞こえるが要するに人間の生き方こそ進歩した他の諸友星で応用されているということ、人間にとつて最も深遠な問題である「意識」について明快に解説してあります。実際、生物が「意識」を持つことくらいこの世で不思議な現象はないのに、そんなことを全く考えようもしない人があまりに多いために「死人の棺をかつく人もやはり死人だ」とイエスが評しているわけです。この英文原書を手にするには六十ドル(邦貨約二万一千六百円)を要しますが、本会発行の日本語版「生命の科学」(全訳。省略箇所なし)はわずか三百円(送料五五円)です。ですからタダみたいなので、まだ多数在庫ありますから未入手の方はぜひご注文下さい。

◎「死と空間を超えて」はすでに品切れとなりましたが、これは内容を少し省略したものが「空飛ぶ円盤とジョージ・アダムスキー」(副題「死と空間を超えて」)と題して有信堂高文社より十一月に刊行されます。未入手の方は直接高文社へご注文下さい。本会では取扱いません。定価は十月十日現在未定なるも四百円以下では引合わないとの由。

◎本誌のバックナンバー(旧号)は次のものが在庫あります。33、34、35号(以上各送料共一三五円) 36、37、39号(以上各送料共一五〇円)。つまり旧号はすべて送料当方負担です。

◎「宇宙哲学」は品切れです。在庫は全然ありません。

◎本誌発行がひどく遅れて申訳ありません。八月の移転騒ぎ、九月の総会準備、その他多忙な日々が続いた上に、輸送が原因でタイプライターが故障を起こし、辺鄙な場所として修理屋から敬遠さ

れたりて予定がすっかり狂ってしまいました。

◎部内移転に際しましては各方面から多大のご援助と激励をたまわりまして心から感謝致しております。まことに人間の親切、親切、親切に貴重なものはないというのを更めて痛感した次第です。先般の総会において「地球を救うにはどうすればよいか」という質問に対して「徹底的な親切を他人に施し、それが連鎖反応的に広がる以外手はないでしょう」と私は答えましたが、これは誤っていないと確信します。極論かもしれませんが、多数の道学者や思想家が百万言を費して説法しても対社会的に何もなければすべて虚言であるように思われます。具体的な行動というものの重要さをしきりに考えさせられるこの頃です。

◎神戸市の巽直道先生から総会出席記念にと角川書店刊「仏教の思想」全集の内、九冊のご寄贈にあずかりました。深謝申し上げます。その他種々の形でご援助下さる方が数名おられますが、氏名公表は不都合であるとお気持をくんで公表は差し控えます。

◎近來GAP会員の方の最関心事はアポロ十一号の月着陸とアダムスキーの体験記との関連性であろうと思ひます。一部の人はアポロ十一号の探險の結果、アダムスキーの主張する月面の水、希薄な大気（これは米当局も存在することをほのめかしている）、他惑星から来た人間の建設した都市等の存在はウソだったのではないかとお考えかもしれませんが、これについては総会の時にお話し致しましたとおり、宇宙飛行士の公式報告なるものが予想通りの陳腐なもので、何ら事新しい内容を含んではいないばかりか、故意に何かを歪曲しているらしいことは新聞記事を注意深く分析してみればわかることで、特に着陸前にラジオで伝えた静の海に怪光が発見された事実や、月面着陸後一飛行士の時計がとまったというテレビの興味深い放送などが新聞には全く掲載されなかつたりで、結局米当局は全世界の熱狂と興奮のさなかに何かの驚異的な新発見事を巧みに隠蔽したのではないかとというのが私共の推測です。厩大な費用を投入した世紀の大実験ですから、その成果をすべてありのままに発表するはずもなく、機密保持は至極当然であり、むしろ大混乱発生の危険回避のために米当局は、賢明な防止策を講じているのかもしれない。いづれにしても問題は、大國政府の公式発表なるものをウ呑みに信じ込む人が多すぎる

ということは確かで、それも記事を丹念に調べた上でのことではなくて、おそらくチャリと見て「ハハ、そうか」とうなずくのが一般の習性であると思われれます。アダムスキーは結局インテキだったのだと断言する場合は、断言できるほどの証拠または知識を仕入れていなければなりません。人間の知識というものは案外にいかに加減なものであるか、牛のツノは耳の上からはえていくか下からはえていくか、私の質問に対して、牛を見なれてもわからない。一般人も（私も加えて）これと大差はないのであります。けだし他人との争いがつまらない理由がここに

◎しかし日本GAPは野暮なドンキホーテの集まりではありませんが、豊かな教養と常識と感応力を求め、人間の飛躍的向上の可能性とその方法を探究しようとして結果したグループです。関心ある方は非難嘲笑に屈することなく団結して前進しようではありませんか。それにしても私個人の活動力には限界がありますので、郡内進出を機会に本格的な出版活動を開始すべく種々企画中で、そのための出資者を求めています。会員で出資に関心を持たれた方、または出資の見込ある人について心当りある方はご一報下さい。詳細を説明致します。

日本GAPニュースレター 1969 第四〇号

翻訳編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP

133 東京都江戸川区篠崎六丁目二三一  
 電(六七九)三二四七・振替 東京三五九一二  
 (久保田八郎個人名義)

頒価一五〇円・送料三五円

★禁無断転載

昭和44年 発行  
 10月30日  
 不定期刊